

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行:関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/index.jsp TEL:0798-54-6019

第三十七回RCCフォーラム講演抄(二〇〇七年十月二八日)

イスラームと平和

ーアラブから見えてくるものー

オムリブージッド



ジャジーラの情報を正確に伝えてい
るとは言い難い。

アラブ人は平和をどのように捉
え、どのように考えているのだろう
か。この講演では、アラビア語のさま
ざまなサイトを通して、アラブ人が
西欧社会に対してどのように感じ
ているのか、また自分たちが平和に
対して果たしていく義務をどのよ
うに捉えているのかについて話をし
た。

イスラームと アラビア語の関係

アラブ・イスラームからの発信は、
西欧のサイトであったとしてもアラ
ビア語での発信が多く、このことが
アラブ世界以外に、アラブの思いが
なかなか伝わりにくいという結果
を生んでいる。そのため、まずイス
ラームとアラビア語の関係を考えて
みる。

イスラームは、預言者ムハンマド
(Muhammad 570?-632)が神から
の啓示を受けたことに始まるが、こ
の啓示がアラビア語で行なわれたこ
とから、『クルアーン』はアラビア語
でなければならぬと考えられてい

る。その根拠となるものは、クルア
ーンの次の章にある。

「これこそ、まさしく万有の主の
啓示である。誠実な霊が、これを
もつて下った。汝が一人の警告者とな
るために、汝の心の上に下ったので
ある、明白なアラビア語によつて。」
(詩人の章二九一一九五、以下引用
はすべて世界の名著『コーラン』中央
公論社、昭和四五年)

「明白な啓典にかけて。われら
は、おまえたちが理解するように
と思つて、これをアラビア語のコーラ
ンとした。これこそ、われらのもとに
ある啓典の母に記されているもの。
至高にして聡明なものである。」
(裝飾の章二一四)

預言者ムハンマドに下された啓示
は、「われらのもとにある啓典の母」
つまり神の国にある啓典そのもの
を伝えたものであること、そしてそ
れがアラビア語であったことから、ム
スリム(イスラーム教徒)にとつて、ア
ラビア語のクルアーンは不可侵のも
のと捉えられているのである。この
ことから、イスラームの言語はア
ラビア語であると言え、また逆に言
えば、アラビア語はクルアーンに使わ
れている聖なる言葉であるため、ア
ラビア語の発信にこだわるという一
面があるのかもしれない。

イスラームにおける 共生の意味

今日イスラームを取り巻くさま
ざまな問題や紛争、たとえばパレス

チナ問題におけるムスリムとユダヤ
教徒との抗争、そしてアメリカの同
時多発テロに代表されるイスラーム
世界とキリスト教世界の対立が大
きな問題となっているが、歴史的に
みるとムスリムはユダヤ教徒やキリ
スト教徒と共生してきた。初期イ
スラームの時代から、ユダヤ教徒や
キリスト教徒との共生は行なわれ、
イスラームの諸王朝時代には、人頭
税を払えば、キリスト教徒とユダヤ
教徒はそれぞれの信仰と自治を認
められていた。そしてパレスチナにお
いても欧米が介入するまでは、アラ
ブ人とユダヤ人の平和的共生は行
なわれていたこと、またイスラーム
世界最大のユダヤ人コロニーがある
チニアでは現在もお平和的共
生が行なわれていることは、一般レ
ベルではほとんど知られていない。

イスラームはもともと多様を認
める宗教であり、その根拠としてよ
く引き合いに出されるクルアーンの
章は、以下のとおりである。

「おお、人々よ、われらは、おまえ
たちを男女に分けて創造した。お
まえたちを種族と部族に分けてお
いたが、これは、おまえたちががい
に知りあうためである。」(部屋の
章三三)

つまり、神は男女を創造しお互い
の出会いを運命付けたように、お互
いが知り合うために人々をいろいろ
な種族や部族に分けたと言うので
ある。アラビア語の「知り合う」
(Tarāṭū)とは、お互いの間に善

日本ではアメリカの同時多発テ
ロ以降、一般の人々のなかでもイス
ラームは暴力や不寛容の代名詞に
なり、理解しがたいものと感じられ
ているようである。毎日のようにテ
レビから流れるイスラームやアラブ
世界についての報道は、テロや紛争、
女性の抑圧などのネガティブなもの
ばかりであるが、一般に私たちが知っ
ているイスラームやアラブ世界は、欧
米人の目を通して見た欧米のメ
ディアのよるところが多く、したがっ
て平和や共生を考えるとときも欧米
からの視点であることが多い。

最近では、去年二月アラブ大手の
メディアであるアルジャジーラに英
語版ができたが、西欧人が西欧人
の視点でアルジャジーラのニュースを
発信しており、アラブの視点でアル

を行なうこと、対話すること、一緒に住むこと、お互い助け合うこと、尊敬し合うことをさしづる。

また、次のクルアーンの章では、言語も人種も多様なこの世界は、神の御心であるということを書いてい

る。「天地と、おまえたちのさまざま
な言語ならびに皮膚の色合いを創
造したもうたのも、神のみしるし
の御心である。」(ギリシア人の章三)

つまりイスラームは、ある二つの文
化、二つの文明、二つの言語、二つの人種
や国民(そが優越とする覇権主義
や中華主義を否定している)のであ
り、この意味で本来イスラームは多
様性を重んじる多元的な宗教であ
ると言える。

宗教間の共生に向けて

次に講演の本题である、イスラ
ムやアラブ社会が、平和や宗教間の
共生をどのように考えているのかを
見て行つた。

現在、世界平和や宗教間対話と
いったことが、世界的にいろいろな
ところで言われているが、西欧諸国
つまりキリスト教側からの発信が目
立っている。しかしイスラーム側から
の発信も活発に行なわれており本
講演ではイスラーム側からの発信
をアラブのサイトを通して見て行
った。

たとえば二〇〇三年からカタ
ールの主催で、首都ドーハにおいて毎

年行なわれている「宗教間対話に
関する会議」(Conference on
Religions Dialogue)がある。この会
議では世界中からムスリム、ユダヤ

教徒、キリスト教徒の聖職者や研
究者が集まり、真の平和を実現す
るための討論が行なわれている。ま

た西欧圏におけるイスラーム組織
からの発信では、代表的なものとし
て、ロンドンの「アラブ・オリエン
ター」(The Arab Orient
Center)や新聞「国際アラブ新聞

中東」(Asharq Alawsat)、報道
機関ではアルジャジーラ(Aljazeera)
などが、宗教間共生について積極
的に発言している。

以下、「国際アラブ新聞 中東」
(Asharq Alawsat)に掲載された、
バーレーンで行われた宗教間対話の
会議についての記事から、いくつかア
ラブ側の意見を紹介する。

「宗教間対話は、歓迎されるべき
である。この対話は、成熟した人々
によつてなされ、そこからたくさん
のよいものが生まれてくるだろう。
純粹で清潔な考えや心から、実り
ある対話が生まれてくるだろう。
そこでは何を信じているかは問題で
はない。個人の信仰については、裁く
のは唯の神のみであるので、人間が
裁く必要はない」(エジプト、アズハ
ル大学、タンタウィ博士)

「宗教間対話には必要なく、す
憎しみの文化は無くさなければな
らないように、お互いに知識を深めな

ければなりません。宗教間対話と
は、相手のことを絶え間なく知り
続けることです。」(アズハル大学、
イスラーム宗教学教授)

「ユダヤ教の信仰、キリスト教の
信仰は、イスラームの信仰の一部で
す。ユダヤ教やキリスト教の人たち
に向けて、私たちはイスラームを信

じろと言つてのではありません、ただイス
ラームの存在を認めて尊重してく
ればそれでよいのです。ところが、
ローマ法王ベネディクト二世のイス
ラームに対しての不用意な発言や、

デンマークの新聞の風刺画など、イ
スラームを認めてくれるどころか、
嫌がらせをしている現状です。イス
ラームは他人に手を伸ばす宗教で
す。しかし手を伸ばしても、聞く耳

を持つてもらえないなら、どのよう
に対話ができるでしょうか? 宗
教間対話と言うよりも、人間とし
て対話することが必要です。」(アズ
ハル大学、イスラーム法学者)

またBBCサイトのアラビア語掲
示板には、アラブ世界各地から、イ
スラーム世界と西欧世界のあり方
に対して意見が投稿されている。以
下に代表的な意見を紹介します。

「西欧社会はイスラームを悪く
思っているが、原理主義をイスラーム
と見ているところがあります。これ
は本当のイスラームではありません
ん。しかし私たちは原理主義をと
めることができませんでした。私た

ちは、西欧社会に対して、本当のイ
スラームの根本を見せることが必要

ですが、そのためにはアラブ世界の
メディアを充実する必要があります。
メディアを通して、本当のイス
ラームのミッションとは何かを、自分
たちに向けて、また西欧に向けて繰
り返し発信することが必要です。」
(クウェート、女性)

「イスラームへの悪いイメージは、二
つのことが原因です。一つ目は、本当
のイスラームではないムスリムの行
動。もう一つは、ヨーロッパ人は、イス
ラームのことを知ろうとしないこと
です。」(オマーン、男性)

「何にでもネガティブとポジテ
ィブの面はありますが、西欧の人はイ
スラームのネガティブな面ばかりを
見えています。イスラーム社会とイス
ラームは違います。アラブやイスラ
ム社会のメディアは弱いため、イス
ラームの真実がちゃんと伝わって
いません」(エジプト、男性)

「ムスリム自身が本当のイスラ
ムをわかつていません。イラクでの暴
力や女性の権利の無視です。これら
は無知からきています。」(ストック
ホルム在住のアラブ人男性)

このように、西欧社会はイスラ
ムが悪いニュースばかり報道している
嫌いがあるというのである。たとえ
ば西欧の衛星放送は、パレスチナ問
題について、イスラエルの受けた損害
や悲劇について報道しているがアラ
ブ側の受けた損害や悲劇については
ほとんど報道することはしてこな
かった。西欧のメディアは双方に公
平に真実を伝えているのではなく、

自分たちの政治に都合のよいところ
を選んで報道してきたというので
ある。

しかしアラブ人たちは、これらの責
任は、自分たちが閉鎖的で、積極的
に世界に向けて自分たちのことを
西欧の言葉でアピールしてこなかっ
たことにもあることを認識してい
るのである。

アラビア語で共生(Ta'ayusha)
とは、二人以上の集団が、愛をもつ
て仲良く生活すること(生きるこ
と)を意味している。最後にアラブ
人の代表として、彼らの言葉を代
弁し、共生に向けてのアラブの思
いをまとめた。

◆アラブ・イスラーム側の課題

- 1 イスラーム世界の若者たちに、正
しいイスラーム教育をしていく
- 2 広く世界に向けて、イスラーム
やアラブ世界をアピールしていく

◆世界に向けての要請

- 1 イスラームやアラブのことをもっ
と知ってもらいたい
- 2 イスラームは本来平和的な宗教
多様性を認める宗教であることを
わかつてもらいたい
- 3 西欧からの報道を鵜呑みにしな
いで欲しい
- 4 自分の宗教を大切にすると同
様、イスラームを尊重してもらいた
い



第38回RCCフォーラム講演抄(2008年6月9日)

私と貴方の難民支援

— 国連の援助活動の現場から —

根本 かおる

はじめに

私は、神戸出身者として、地元で難民問題や国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の活動についてお話できることを大変嬉しく思います。UNHCRの職員には神戸・阪神地区出身者が多いのですが、きっと国際性が豊かで外に開かれた風土と文化が多少なりとも影響しているのではないのでしょうか。さらに、神戸そして阪神地区の方々は大地震に見舞われ、かけがえのない方々を亡くされ、避難生活を強いられ、そしてたくましく復興のみちを歩きました。紛争や深刻な人権侵害を理由にふるさとを追われる難民の人々に通じるものを体験なさっているのでは、とも思います。私は、十年余り、UNHCRの職員としてアジアやアフリカの難民支援の最前線で勤務し、現在はUNHCRの公式支援窓口、日本UNHCR協会の事務局長として、難民問題などについての広報活動と、民間の個人・団体・企業から寄附・募金をはじめとする様々な協力を拡げていくことを中心に活動しています。関西学院大学が他の大学に先駆けて、二〇〇七年度から日本にいる難民を奨学生として受け入れてくださっていることに、感謝申し上げます。本日は、難民とはどのような人たち

をさすのか、UNHCRの活動はどのようなものなのかについてお話したあと、私が入力して関わってきた難民女性の課題とUNHCRの活動、そして、日本にいる私たちにどのような協力ができるのか、について触れたいと思います。

難民問題とUNHCRの活動

日本では、「ネットカフェ難民」という言葉が昨年の流行語になり、その他にも、IT難民、結婚難民、お産難民、リハビリ難民など、「難民」という言葉を使った様々な造語があります。「非常に困難な状況にある、さまよえる人々」との意味で使用されていますが、UNHCRの支援する難民は一体どのような人々を差すのでしょうか。一九五一年に採択された「難民の地位に関する条約」は、難民を「人種、宗教、国籍もしくは特定の社会集団の構成員であることまたは政治的意見を理由に迫害を受けるおそれがあるという十分に理由のある恐怖を有するために、国籍国の外にある者であって、その国籍国の保護を受けられない者またはそのような恐怖を有するためにその国籍国の保護を受けることを望まない人々」と定義しています。民族、宗教、政治的な意見の違いなどを理由に標的とさ

れ、命を狙われたり、不当に逮捕されたり、拷問を受けたり、脅迫を受けたり、財産を没収されたり、子どもが学校に行けなくなったり、ということが国によつてはあるのです。また、女性が組織的な弾圧の手段としてレイプされるということもあります。一九五一年難民条約採択時には、個人を標的とする迫害が念頭にありましたが、のちの難民法の発展の中で、紛争や武力衝突などの結果国境を越えて逃げる人々についても難民というようになりました。また、同様の理由で、国内で避難生活を送る人々については、「国内避難民」といいます。

UNHCRは、一九五〇年、難民となった人々の人権を守り、難民問題の解決に取り組むために設立された国連機関です。これまで二度、ノーベル平和賞を受賞しました。スイスのジュネーブに本部があり、世界一〇カ国以上、六三〇〇人以上の職員が働いています。トップをつとめる歴代の国連難民高等弁務官の中には、日本人の緒方貞子さんもいます。日本人職員はおよそ八〇人で、その三分の二が女性です。多くが難民支援の最前線で、難民の人々の心に寄り添いながら、献身的な仕事をしています。ユミコ、マサコ、そしてサダコといった名前の難民の赤ちゃんがたくさんいるこ

とからも、いかに日本人女性が難民の人々の心の拠り所となっているかがお分かりいただけるでしょう。

UNHCRの活動は多岐にわたります。避難してきた人々の命と権利を守るほか、生活物資の支給などを通じて避難生活をサポートします。テントや毛布、水、食糧などの救援物資や医療・教育などのサービスを提供し、入国政府、他の国連機関、NGOなどと連携して提供します。緊急事態を乗り越えても、ふるさとに平和と安全が戻るまで避難生活が続きます。UNHCRが関わっている難民状況は、平均して一六年にも及びます。経済的自立を促すための職業訓練や、心の傷に対応するカウンセリング、ストレスを発散できるためのスポーツ支援など、物質的なものを越えた援助活動が必要になります。そして、難民の人々が難民でなくなる日が来るよう、橋渡しをすることが必要です。難民状況への解決には三つの解決策があります。ひとつは、故郷への帰還。しかし、故郷にもどることが難しい場合には、避難先での定住や、第三国への定住など、第二のふるさとを見付けることが解決策となります。

私は最近、シリアに住むイラク難民の状況を視察してきました

た。イラク戦争開始から五年。イラクのことが日本のメディアで報道されることも少なくなり、四七〇万人もの人々がイラク内外で避難生活を送り、その内一五〇万人ものイラク人がシリアに難民として身を寄せています。イラク難民はシリアでは原則として合法的に仕事につくことができないため、イラクからシリアに逃げてきた当初はまだ十分に蓄えも少なく、時間とともにより絶望的になってきています。一人でも多くのイラク難民の子どもたちが学校に通い、将来のイラクの復興に貢献できるように、UNHCRとユニセフは、二〇〇七年夏から共同で、学校・教室の拡張や教育機材の提供、補充教員の養成、制服・文房具の提供などの「Back to School」キャンペーンを実施しています。シリアで学校に通うイラク難民の子どもの数は、キャンペーン開始前の三万人余りから二〇〇八年四月時点で四万七千人余りとおよそ五〇%増えています。一度は入学したものの学校に行かなくなった子どもたちも多いと聞きます。

また、ブータンという国をご存知でしょうか。ブータンには仏教徒が多く暮らしていますが、一九世紀後半以降ネパールから移住してきたヒンズー教徒もいます。そのネパール系ブータン

人たちが、一九九〇年代初頭に政治的迫害を受け、難民となってネパールに避難してきました。現在、ブータン難民約一〇万六〇〇〇人がネパール南東部の七つのキャンプで避難生活を送っており、私はネパールで支援活動にあたりました。ブータン国内でなかなか政治的解決が進まないため、難民たちはふるさとに帰る目処が立たないまま一五年以上におよぶキャンプ生活を強いられています。これ以上キャンプでの難民生活を強いるのは非人道的だとして、アメリカやカナダなどの国々が多数に上るブータン難民たちを受け入れることになり、今年から彼らの出国・受け入れが始まりました。

難民女性とUNHCRの支援

さて、難民女性についてお話ししましょう。難民・避難民の約八



割は女性と子どもです。夫が兵士として連れて行かれたり、殺害されたりした女性は、家長として、子どもたちを養い、守っていかねばいけません。難民キャンプで生活する女性は、社会的差別だけではなく、戦禍から逃げる時、また難民キャンプに辿り着いてからも、暴力やレイプなど、身の危険を感じることもしばしばあります。難民になったことで仕事を失い、家族を支えられなくなった夫が、その苛立ちを家庭内暴力という形で妻におつけることもあります。このような状況に配慮して、UNHCRでは、国連難民高等弁務官が難民女性に対する五つの誓い（コミットメント）を立てて、難民女性の保護と支援を組織の最重要課題の一つとして位置づけています

（一、難民女性のキャンプ運営への参加を促進、二、家族単位でなく、性別を問わない、個人単位の難民登録の徹底、三、性暴力や性的搾取への対応と予防措置、四、支援物資の配給の運営への難民女性の参画、五、生活用品の配布）。

緒方貞子さんは国連難民高等弁務官在任当時、女性の持つ可能性に目を向け、難民や帰還民の女性のニーズを汲み取った支援を行うことに尽力しました。紛争後の復興期における女性の役割への緒方さんの着目は、かつ

て対立した民族が共に生きることを支援するプロジェクトを生み出しました。たとえばボスニアでは、セルビア系とクロアチア系の女性たちが一緒にパン屋を開き、パン焼きの研修や店の運営が異なる民族間の対話の場となりました。

難民女性たちが手に職を付け、自立していく上で、職業訓練や少額の収入が入るような支援プロジェクトは欠かせません。しかしながら、活動資金が限られている中、水・食糧・医療といった緊急性の高い分野が優先されやすく、中長期的に女性の自立を支える職業訓練などは、ニーズがあっても資金不足でなかなか実施できません。そこで、UNHCRでは、新たに、世界中の女性指導者や経営者、および趣旨に賛同する企業・団体に呼びかけ、難民女性の自立を世界中の女性の連帯で支えていくことを始めました。

この「ウイメン・リーダーズ・フォー・ライブラリーフツズ Women Leading for Livelihoods (WLL)」プログラムは、世界各地の難民女性や少女たちの経済的自立とエンパワメントを支援する、UNHCRが主導するプログラムです。WLLでは女性には被害者やただの援助対象者ではありません。彼女たちは適切な支援が受けられれば、自身の、そしてその子ども達や

家族、また地域社会の生活をも変えることが出来るのです。

私たちにできること

UNHCRの活動資金は、各国政府からの任意の拠出金と企業、団体、個人からの寄附・募金に大きく支えられています。UNHCRと日本の企業との連携事例も、企業の社会貢献事業への関心の高まりなどから、次第に増えています。企業の本業との関連がある形のプロジェクトでご支援いただける例も増えていきますし、また、「広報発信」でのキャンペーンに協力してください。多くの例もありません。より多くの方々に、「自分にもできる難民支援」を考えていただき、繋がっていただきたいと思っています。

編集後記

今回は先日開催された現代における「平和」に関するフォーラム（抄）二編をお届けします。約三年にわたった本主題はこれで終了し、次回の主題は、地元神戸を舞台とした宗教の多元主義の考察を予定しております。引き続きご注目願います。

経済学部准教授RCC主任研究員

舟木 讓